

ONE'S
voice

野田秀樹 × アイタイヒト

VOICE.7

演出家

ソン ジン チェク

孫 振策 (Sohn Jin-Chaek)

「演劇」という名の冒険 — 日韓の演劇事情

今秋、ソウルと東京で上演される国際共同制作作品『半神』の準備のために、度々ソウルを訪れている野田秀樹。オール韓国キャストによる『半神』の演出という冒険的試みに意欲をみせる野田秀樹は、ワークショップ形式のオーディションの合間を縫って、韓国を代表する演出家のひとり、孫 振策と再会、昨今の日韓の演劇事情について語り合った。

構成・文：編集部
photo: CHOI YONG SEOK

日韓共同制作『半神』の立ち上げ〜 昨今の韓国現代演劇事情

編集部 今年の秋に野田さんの『半神』を、東京芸術劇場と明洞芸術劇場の共同制作としてソウル、そして東京で上演することになりまして、まずはそのあたりのことからお話を進めていただければと思います。

野田 孫さんとはいつ初めてお会いしたかな？

孫 おそらく『キル』ではないでしょうか？

野田 でも、初めてお会いしてからもう20年くらいは経っているような気がしますね。

孫 (ソウルでおこなった『半神』のためのオーディションには) いい俳優が集まりましたか？

野田 そうですね。『赤鬼』と一緒に仕事をした俳優も参加してくれました。そういう時

間の積み重ねがあるのは嬉しいことですね。まだキャストの最終決定はしていないのですが。

孫 みな、野田さんの作品には出演したいでしょうね(笑)。話は変わりますが、実は今、私は半月間の断食中なんです。

野田 えっ、そうなんですか？食欲はないのですか？

孫 少し懺悔のような気持ちでやっているのです。今まで欲望のままに食べてきてしまいましたし、どうもお腹が出てきたのも嫌で(笑)。1ヶ月前くらいから調整して8kgくらい痩せました。もちろん野田さんにはまったく必要ないことではしょけど(笑)。昨年11月に国立劇団との契約任期が終了し、一度自分自身を空っぽにすることが大切なと思い始めて。

野田 韓国の演劇界を巡る状況はどうです

か？

孫 韓国では、以前は民間の劇団が活発で、公共の劇団はマンネリ化し停滞していたのですが、今は状況が逆転して、公共の劇団の方が活発で、民間の劇団は少し停滞しているような気がします。



NODA HIDEKI

野田 若い世代はどうですか？韓国の若手演劇はとても活発な印象がありますが。

孫 確かに(大学の)演劇学科や映画学科を卒業した人たちを中心に頑張っていると思います。韓国にはそうした大学が70校以上もあるんですよ。私立大学は人気取りのためにそうした学科を創設している面も否めませんが、ただ、どちらかというと演劇よりは映像の世界に興味を持っている人が多いかも知れませんね。もちろん(この世界は)数より質が大切なのですが、今はまだ質が追いついていない状況もあります。映画専攻と演劇専攻ははっきりと分かれていない部分もありますが、韓国では、実力のある俳優は、なべて映画やTVの世界を目指そうとしている人が多いとは思いますが。

野田 なるほど。日本では、演劇を目指す、というか舞台上芝居をするというより、まずは芸能事務所に入ってタレント業をするという道があります。

孫 韓国も同じような状況です。TVドラマでデビューして、のちに演劇の世界で本格的な演技の勉強をする。でも、日本では積極的に舞台にも出演する俳優が多くいると思いますが、韓国では映画やTVで売れている俳優たちは、演劇や舞台には出演した方が多いのです。

舞台芸術への公的支援

野田 一般的な俳優たちのそうした傾向は、日本もたいして変わらないですよ。演劇や舞台芸術の世界のことで言えば、国際舞台芸術フェスティバルの規模なんかは、韓国の方がずっと規模も大きくて充実していますよね。

孫 確かに他国と比べて韓国政府の芸術文化支援はかなり強力だとは思いますが。政府や公的機関が積極的に文化芸術支援策を推し進め始めたのはここ10年くらいだと思いますが、こうした政策にはメリットとデメリットの両側面があります。つまり、以前の演劇人は、豊かな生活とか、家庭的な幸福とか、そうした何かを犠牲にしてまで演劇に情熱を傾けていた部分が大きくありましたが、今は(政府などの)公的支援がなければ演劇を志すこともせず、作品を作らなくなってきてしまっている…つまり、そうしたデメリットの部分も感じています。

野田 それは確かにそうかもしれない。僕も世代的に、公的支援なんて考えてもいなかった世代だから、基本は「誰が何と言おうと、自分は演劇が好きだからやる!」という姿勢であり続けている。それに比して今の若い世代は助成金などをとることに実に長けている。時として、芝居がしたいのか、助成金をもらいたいのか、わからない部分すらある(笑)。だからといって助成金なんて必要ない、ということでもないんですけどね。

孫 まったく同感です。昔の方が良かった、とは言い切れない。もしかすると今は文明史の転換期なのかも知れませんね。文明というのは、かつては宗教的であったり、生き方そのものであった、それが今は、より“欲望”と結びつきの深いものになっているのではないか。今の時代は“意味”より“イメージ”の方が大切で、また“精神”より“身体”、“価値”より“欲望”に重きが置かれる時代なのかも知れません。“過程”より即“結果”を求める傾向とも言えるかも知れません。それに対して演劇は何ができるのか、演劇のあり方はどうあるべきか、ということを考えなければいけないのではないのでしょうか。演劇というのは作る過程が大切だと思うのですが、より結果や成果を求められる時代になってきたということかも知れません。

野田 耳の痛い話ですね。今の時代にどんな演劇を続けたいのか…。

編集部 韓国では、総じて演劇公演に若い観客が多いと思います。実際のところどうなんでしょうか？

孫 韓国では企業も文化芸術支援を活発におこなっています。そうした動きの背景には、文化芸術を支援しないと、本業である商売もうまくいかないという空気があるんです。つまり、基本的には文化芸術支援も資本主義システムと不可分なんです。私が80年代にはじめて演劇の勉強をしにイギリスに行った時には、どの劇場にも年配の目の肥えた観客が大勢いることが、とても羨ましかったことを覚えています。逆に、若い観客だけしかいない演劇は、観客層の厚みが足りない、とも言えませんか。

野田 確かに僕も93年にロンドンに行った時に同じような感をもちました。その頃は僕もまだ若い世代に属していて、いわゆる本格

的な現代演劇をみる習慣はあまりなかった。で、慌てて背伸びをしてたくさん現代演劇を見ました。今も状況は同じで、若い人はそれほど背伸びをしようとはしていない気がする…メンタリティの問題もあるのかも知れない。若い人たちにそこは問いかけていきたいとも思います。

孫 今の若者たち明日のことなんて考えていないから。

野田 それはいつの時代でも同じですね(笑)。

孫 若い世代は、演劇が、自分が対価を払うに見合うものかどうかを計っているような気がします。



SOHN JIN-CHAEK

野田 若い世代に限らず、以前は、演劇をみて思索することこそが愉しみの大きな要素だったのに、今はより消費型になっているのかも知れませんね。「あ一面白かった。」と、いつかすぐに忘れてしまえるようなものが好まれてしまう。思考することこそが大切かどうか、愉しみのひとつなのに、すぐにでる結果を求め過ぎなのかも知れませんね。

孫 同感です。特に若い頃は、悩んだり難題に向き合うことは、楽しいことでしたよね。文化と資本の結びつきがますます強くなってきていると感じています。

野田 例えば、普通の人が「数字がとれた。とれない。」という言い方をするようになったりするでしょ？そんな表現を聞いていると一億総業界人化しているように思える。

孫 今の時代は、ネットとスマホの時代です。なので必要以上に数字に気を取られる。もしかすると、演劇という表現は、もう少し狭いコミュニティにこそ向けるべきものなのかも知れない。

野田 インターネット検索でトップを持つてく

ることは、資金力を使って操作もできる。そうした意味では、今の時代は、報道ニュースですら、ある種の「表現」というか恣意的な情報になってきている。別に芸能人の話なんて見たくもないのに、ネットを通じていやがおうにも目に飛び込んできてしまう。そうした環境下で、演劇はどこに向かうべきなのか。かといってただ狭いところに追い込んでいくのも違う気がする。

孫 なので、今の自分にできることは、物事の本質を再度見極め、問題提起することだと考えています。

野田 それで断食を?(笑)

孫 いやそれは(笑)。

韓国と日本の差異

編集部 野田さんが韓国で仕事をするのは今回で三度目(『赤鬼』『THE BEE』に続いて)になりますね。

孫 私も以前、日本人俳優と何度か仕事をしてきているのですが、実際やってみると、(日本と韓国では)とても違うなと感じました。どちらかという韓国人は右脳、日本の人は左脳が優れている、と。日本の演劇システムはとてもよくできていて、演技にもあ

る種の“型”がある。韓国の俳優は、そうした“型”にはまることになりに違和感があって、どちらかという“即興”を好むというか、自由であることを好む傾向があります。ご存じの通り、韓国の生活文化には大きく言うところの側面があります。ひとつの側面は「儒教文化」そしてもうひとつは「シャーマニズム」です。つまり、表向きは模範的であろうとする心理と、それとは逆に規範から逃れようとする心理面とのふたつの強烈なメンタリティがせめぎ合っている。伝統舞踊や伝統音楽、さらに言えば韓国のここ最近の目覚ましい経済発展も、そうしたふたつのメンタリティに支えられていると思います。ですので、野田さんには、そうした韓国人俳優が持っている自由奔放さやダイナミズムをうまく活用してほしい、という期待があります。私は、『アジア温泉』という作品で、日本の俳優さん達からも開放性や遊び心をなんとか引き出そうと試みたのですが、なかなかうまくいきませんでした(苦笑)。地理的にみても、イタリアや韓国のように半島に住む人たちはどちらかというと即興的で情熱的、イギリスや日本のような島国の人たちはどちらかというと内向的で、感情を内に秘めるタイプが多いのではないですか。

野田 なるほど、それはおもしろい分析ですね。シャーマニズムというのは、原始信仰というか、巫女の世界感ですよ。そして韓国人は、僕の目には儒教的なところや生真面目にみえるところがある。なので僕は、あえて不真面目ということではないのだけど、柔らかいところから入ろうとして、その上でシャーマニズム的なものが見つかる、とても楽しいんですよ。俳優だけでなく、観客も足を踏み鳴らしてくれたりして、とにかく熱量がある。今回もそうした韓国人の特性をかいくぐって、共同作業を試みたいと思っています。

孫 韓国の俳優は、演出家が細かく決め込むのではなく、遊ばせると喜ぶますからね。

野田 ですよ!なので今回のオーディションも何も決めずに始めました(笑)。

孫 そういえば、以前『半神』も見たことを今になって思い出しました。素晴らしかった。

野田 コクーンでの再演のやつですね、どうもありがとうございます。今回も楽しみにしていて下さい。

今回のアイタイヒト

孫振策 SOHN JIN-CHAEK

ソン・ジンチュク 演出家。1947年生まれ。韓国の伝統芸能の手法を現代劇創作に生かした演出家として国内外で知られる。67年劇団山河に入団。学生時代より韓国伝統芸能の構造に関心をもち資料を収集。74年『ソウル・マルトギ』で演出デビュー。81年より上演し続けている『マダンノリ』は、国民的人気を博している。82年ロンドンRSCで研修。86年劇団美蘭創立。88年ソウル・オリンピック文化芸術祝典「漢江祭」総監督、98～00年ソウル国際演劇祭芸術監督、02年ワールドカップ開幕式総演出など国家的イベントの演出も手掛ける。さらに、01年日韓共同制作「火計り」、04年新国立劇場「The Other Side-線のむこう側」など日本での演出作品も多い。

野田秀樹 NODA HIDEKI

のだ・ひでき 劇作家・演出家・役者。1955年長崎県生まれ。東京大学在学中に「劇団 夢の遊戯社」を結成、一大ブームを巻き起こし92年に解散。ロンドン留学を経て93年、NODA・MAP設立。『キル』『ハンドラの鐘』『オイル』『THE BEE』『ザ・キャクター』『南へ』『エッグ』『MIWA』など次々と話題作を発表。故 中村勘三郎と組んで歌舞伎「野田版 研辰の討たれ」野田版「鼠小僧」野田版「愛陀姫」の脚本・演出を手掛けるほか、海外の演劇人と積極的に作品を創作するなど、演劇界の旗手として国内外を問わず、精力的な活動を展開。04年5～6月には「THE BEE」English Versionをパリ、ルクセンブルク、ドイツにて上演し、高い評価を得る。09年、東京芸術劇場芸術監督に就任。多摩美術大学教授。

国際共同制作『半神』 原作・脚本:萩尾望都 脚本・演出:野田秀樹
2014年9～10月 ソウル、東京を巡回。

『エッグ』作・演出:野田秀樹

2015年2～4月 東京、パリ、大阪、北九州を巡回予定。

www.geigeki.jp



ONE'S
voice

野田秀樹 × アイタイヒト

東京芸術劇場×明洞芸術劇場 国際共同制作

「半神」 原作・脚本:萩尾望都 脚本・演出:野田秀樹

1986年の初演以来、高い評価と人気を誇る傑作「半神」を野田秀樹自身が再演出、オール韓国人キャストで上演!

東京公演:10月24日(金)～10月31日(金)(27日は休演) 会場:プレイハウス
出演:チュ・イニョン チョン・ソンミン ほか
料金:S席 5,000円 A席 4,000円 S席ペア券 8,500円/2枚 65歳以上(S席) 4,500円
25歳以下(A席) 2,000円 高校生 1,000円 (全席指定・税込)
チケット一般発売:8月2日(土)

韓国公演:9月12日(金)～10月5日(日)
会場:明洞芸術劇場(韓国・ソウル) <http://www.mdtheater.or.kr/home/main.aspx>

東京公演 主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
共催:明洞芸術劇場 独立行政法人国際交流基金
韓国公演 主催:明洞芸術劇場 共催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 独立行政法人国際交流基金
企画協力:NODA・MAP 株式会社小宇組 オフィシャル・エアライン:ANA

<野田秀樹作品セット券>

「半神」と「小指の思い出」の
お得なセット券を一般発売に
先がけて先行販売いたします。

料金:9,000円 1名様分
(全席指定・税込・S席・枚数限定・前売のみ)
セット券発売開始:7月19日(土)
取扱:東京芸術劇場ボックスオフィス

「小指の思い出」 詳細はP14へ

作:野田秀樹
演出:藤田貴大

9月29日(月)～10月13日(月・祝)
(10月1日と6日は休演)
プレイハウス
料金:S席 5,500円 A席 4,500円 ほか
(全席指定・税込)

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)
助成:平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業